

# 視察報告書

真志会

視察先 北海道苫小牧市  
視察内容 苫小牧市まちなか総合プロジェクト  
日時 令和4年8月3日  
視察者 木戸理江、桑原一知、小路貴紀、  
谷口明弘、真野頼隆（報告者）

苫小牧市は東西に40kmと長く、太平洋を臨む約17万1千人が暮らす道内4番目の都市である。海の玄関「苫小牧港」と空の玄関「新千歳空港」の「ダブルポート」を有し、

鉄道、国道、高速自動車道などの交通アクセスにも恵まれた、北海道経済発展の大きな役割を担う産業拠点都市でもある。

また、紙・パルプ・自動車部品、金属などの工業基地、石油備蓄基地や道内最大の火力発電所を有するエネルギー基地など多様な産業が集積しており、苫小牧東部工業団地の総面積10,700ha（エコパークの約185倍）の広さには驚くばかりである。

スポーツはスケート、アイスホッケー等冬



のスポーツが盛んで、スケートリンクも数ヶ所の施設を有し、名門王子製紙は今も尚、リーグのトップで活躍している。ほっき貝は日本一の水揚げ量を誇り、市の貝にもなっている。

今回の視察内容である「苫小牧市まちなか再生総合プロジェクト」のまちなか（中心市街地）は、商業、業務、居住等の都市機能が集積し、長い歴史の中で文化、伝統を育んだ様々な機能や役割を持つ「まちなかの顔」であっ

たが、モータリゼーションの進展、大規模集客施設の郊外立地、居住人口の減少等によるまちなかの地域力低下に加え、商業環境の変化により、顧客・消費者ニーズへの対応が年々難しくなり、まちなかの衰退が進みつつあった。

そのような中、平成23年6月に「まちなか再生総合プロジェクト（CAP）」がスタートした。「CAPプログラムパート1」では“長期的な都市運営の観点からまちづくり



なかに対する、新たな誇りや愛着を育てる取り組みを実施している。

苫小牧都市再生コンセプトプランの構成要素として、「ウォーカブルなまちづくり」「ウォーターフロントの魅力発信」「次世代産業の展開」「人材育成・多文化共生」の4つがあげられる。

また、中心市街地の活況を取り戻すため、市民会館・文化会館・労働福祉センタ・交通安全センターの4つの施設を結合した(仮称)

苫小牧市民ホールの建設が、R8年完成予定のPFI事業として進められている。



# 会派行政視察報告書

報告者 真志会 桑原一知

## 1. 派遣者

(真志会) 真野頼隆 谷口明弘 小路貴紀 桑原一知 木戸理江

## 2. 視察の概要

令和4年8月3日(水)

北海道安平町 「日本型子どもにやさしいまちづくり事業」

## 3. 視察内容

安平町は西側を馬追丘陵から続く標高 100m~150m程の丘が北から南に走っており、東側は夕張山系に連なる山地になっている。北海道の平均気温からすると暖かく、積雪も少ない地域である。また安平町は名馬「デーブインパクト」のふるさとであり、日本でも馬産地の1つとして、競走馬を輩出している町である。

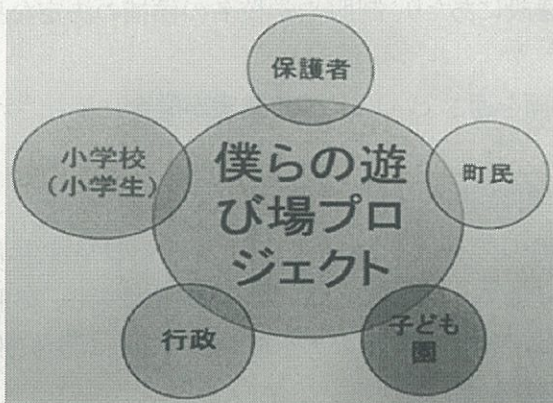
今回の視察「日本型子どもにやさしいまちづくり事業」について、視察を行った。

この事業に取り組むきっかけは、2017年に開催された「こども環境学会 2017 大会」で日本ユニセフ協会の方から声をかけられたことである。

安平町が従前から子ども達の『遊び』に着目しており、日本ユニセフが提唱している CFCI (Child Friendly Cities Initiative)との親和性は高いと考えられた。

これまでの取り組みとしては、公私連携法人に指定し民営化された「はやきたこども園」「おいわけこども園」で町の独自条例や保育料(保護者負担額)を半額としている。

また、子育て世代に選ばれるまちとして「園庭づくり・園庭“外”の遊び場づくり」等活動している。



- 総合的な学習の時間の活用
- 早来小学校6年生の園庭での活動

アクティブラーニング

屋外の“こどもの世界”再構築

認知能力+非認知能力の向上

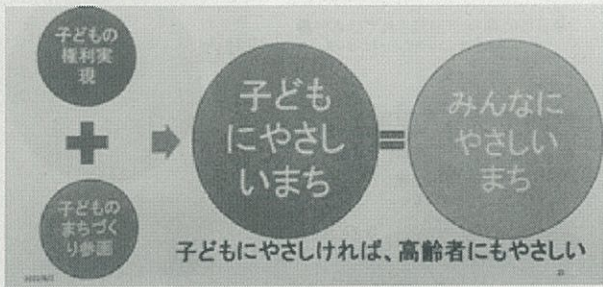
『生きる力』の体得=安平町の力



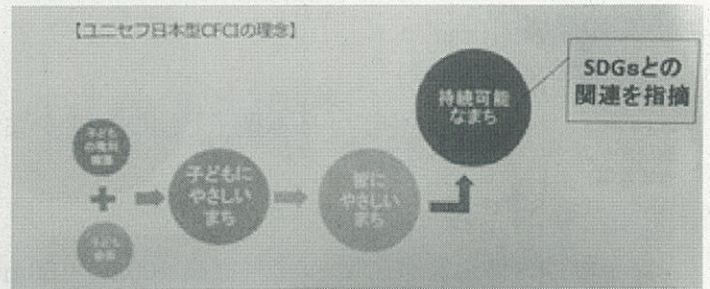
この様に今までの安平町の取り組みと CFCI の考え方を融合して新たな取り組みが行われている。  
 例えば、「まちの活動に積極的に参加し、子ども達の意見を聞きながら進める」「震災後の復興としての義務教育学校づくりに、子ども達の意見をとり入れた」などである。

今後も、子ども達の主体性を引き出す機会を増やしていきたいとの事である。

(安平町の解釈)



(日本ユニセフ協会の解釈)



●子どもお年寄りも、誰一人取り残さない。

●子ども達の意見を聞き施策を立案、実行していく。

安平町が目指すところ

安平町が目指すところの実践では、あびら教育プラン(子どもの意見を基にした事業展開)。学校再建(アンケートや会議参画を通して子どもの意見を反映)。

また、安平総合計画や生涯学習計画・教育大綱・子ども子育て支援事業計画でも反映されている。

具体的な取り組みは、子ども達が考える特産品・義務教育学校の建設にあたり、制服や学校名の候補の決定など児童生徒にアンケート調査を実施した。

アンケートの中で義務教育学校周辺の道路の安全を守るため、車両を通さないようにする議案が議会に提出され可決している。

また平成30年9月6日に発生した北海道胆振東部地震により安平町は甚大な被害を受けた。日常生活を奪い、町全体に暗い影を落とすこととなり、特に早来中学校の校舎及び校地のダメージは大きく、元の場所での学校生活は遅れなくなった。しかし、安平町は、「子どもたちの未来」のため、そして、「未来につながる復興」を目指し、安平町に住む町民の方々をはじめ、地域・民間・行政、そして安平町に関わる全ての方々の力を結集し、被災により仮設校舎での生活が続いている早来中学校の再建の実現に向けた取り組みを進めている。



(建設中の義務教育学校)

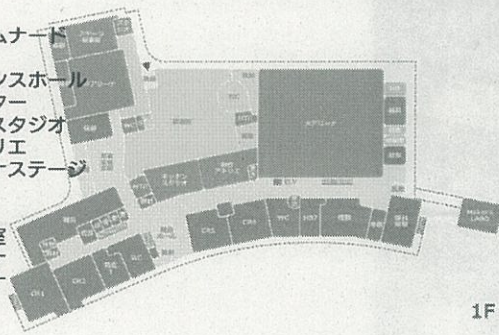


(隣接するはやきたこども園)



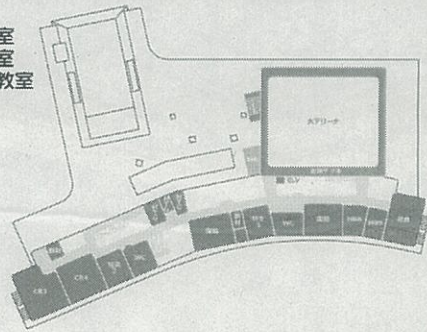
## 1階

教室  
光のプロムナード  
図書室  
エントランスホール  
校務センター  
キッチンスタジオ  
創作アトリエ  
中アリーナステージ  
スタジオ  
理数教室  
理科実験室  
大アリーナ  
中アリーナ  
木工室

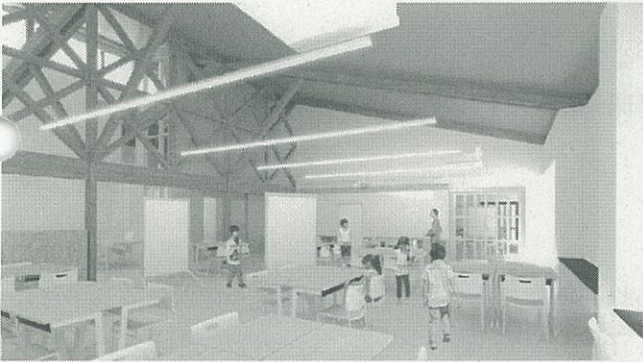


## 2階

教室  
英語教室  
国語教室  
社会科教室



### (教室)



1年生から6年生は、成長を感じられるような形式の異なる教室を用意し7年生から9年生は、教科それぞれで教室が異なります。音楽の時間に音楽室へ行くように、英語の時間には英語用の教室へ行き授業を受けます。また、ホームルームを行ったり、休み時間を過ごしたり、持ち物をしまうロッカーを置いたりする「ホームベース」と呼ぶ場所をつくります。

1年生から6年生は、成長を感じられるような形式の異なる教室を用意し7年生から9年生は、教科それぞれで教室が異なります。音楽の時間に音楽室へ行くように、英語の時間には英語用の教室へ行き授業を受けます。また、ホームルームを行ったり、休み時間を過ごしたり、持ち物をしまうロッカーを置いたりする「ホームベース」と呼ぶ場所をつくります。

### (図書館)



児童・生徒だけでなく、地域の方も楽しめる「みんなの図書室」にし地域の方々との交流が目的。図書室には、約35,000冊の本を置くとの事。



(大アリーナ)



体育館は大人が試合できるバスケットコート1面、小さいバスケットコート2面分でき、バレーボールなどもできるような高さとしします。2階は、雨の日や冬などに走ることができる。

小アリーナも建設。350席のイスを置くことができるので入学式や卒業式、発表会などができる場所とする。また、ステージの扉を閉めることで、音楽室のように使える。スポーツは、卓球、体操などで使うことができる。

#### 4. 所感

少子高齢化の中、本市での義務教育の在り方を考えさせられる研修であった。震災の復興から立ち直る子ども達のアイデアと大人の関わり方など興味深いものがあった。子ども達の「遊び」を基に社会性に繋げていく事の必要性があることも新しい発見である。ただ「遊び」＝「学力向上」ということが可能なのかという疑問も残り、今後の進展も注視していきたい。

義務教育学校の設立には、本市でも考えていく必要があると感じた。特に山間部では児童・生徒数が年々減少しており、義務教育学校も魅力的な取り組みである。また学校という場所だけではなく、地域のコミュニティーとしての役割も目指すべきであると感じた。

校名も安平町立 早来学園に決まり令和5年1月震災に遭った(早来中学校・早来小学校)生徒・児童は新校舎で授業が始まり、令和5年4月には安平町(早来中学校・早来小学校・遠浅小学校・安平小学校)の全児童・生徒が新しい学び舎でスタートする。

その時には是非視察に伺いたいと思う。



# 視察報告書

視察地： 北海道小樽市

日時： 令和4年8月4日（木曜日）午前10時～

視察内容： 生活困窮者自立相談支援事業について

- ・生活保護申請数の削減、8050問題の解消

派遣者： 真野頼隆、谷口明弘、桑原一知、小路貴紀、木戸理江、

訪問先： 小樽市福祉総合相談室

内容： 小樽市は北海道の後志地方の東端に位置し、明治から大正期には石炭はもとより雑穀、日用雑貨品の輸出が盛んになり、海産物の7割が小樽に集まったといわれるほど。明治38年には南樺太が日本の領土となり、樺太航路が開設され、さらに第一次世界大戦のころには欧米航路も開かれ多くの船舶が来航し大変な賑わいを見せた。色内本通りには多くの都市銀行や商社が軒を連ね「北のウォール街」と呼ばれ、小樽の穀物相場がロンドン相場に影響を与えるといわれるくらい活況を呈していた。

しかし、第二次世界大戦後、エネルギー資源の転換、経済情勢や流通機構が大きく変わったことにより小樽の経済は衰退の一途をたどり、「斜陽のまち」と言われた長い停滞期に入るが、経済の振興を図るため、札幌自動車道の建設、関西地方を結ぶ大型フェリーの就航、港湾施設の整備、小樽駅前再開発事業、国道拡幅工事、臨港線の建設などの背策を進めた。これら都市基盤整備の中で、もはや役割を失っていた「小樽運河」の埋め立て計画が持ち上がり、後の小樽のまちづくりに大きく関わる運河論争という一大論争が町を二分して約十



数年続いた。昭和54年全部埋め立てから、一部埋め立ての折衷案をもって決着し昭和61年に現在の小樽運河の姿としてよみがえった。

小樽運河と周辺の倉庫群、歴史的建造物が織りなすノスタルジック漂う街並みが人気を集め、近年では700万人を超える国内外の観光客が訪れていたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年度の観光入り込み客数は259万5400にんと1/3まで減少している。

小樽市は対象11年8月1日に市制を施行しちょうど100年の節目に当たる。またちょうど市長選挙の最中に我々の視察を受け入れていただくことになり、大変恐縮した。庁舎自体も歴史的建造物であり、未だに空調設備などが未整備であった。市の花が「ツツジ」であり、水俣市と同じところが親近感がわいた。

さて、本題の生活困窮者自立相談支援事業であるが、担当者の説明を聞く限り、特段の取組をしているようには聞こえず拍子抜けしたというのが正直な感想だ。

別表に示すように、小樽市における過去5年間の生活保護申請件数の推移をみると緩やかな減少傾向を示しており、その要因を担当者に質したところ、生活保護の削減に向けた取り組みは行っていないが、本誌の人口動態の要因により申請件数や世帯数が減少傾向にあること、また、平成27年度的生活困窮者自立支援法施行に伴い、第二のセーフティーネットとして一定の役割を果たしているのではないかと分析しているとの回答があった。

就労支援についてはどうなっているかと質したのに対し、生活困窮者自立支援事業における終了支援事業、および同制度の任意事業である就労準備支援事業を実施している。自立相談支援事業における相談の中で、就労を希望する方や世帯の課題解決のため就労を要する方などに、公共職業安定所などと連携して求職活動の支援を行うことや、就労後の定着確認などを実施するとともに、無料職業紹介所として登録し、求人情報を提供するなどの支援を実施している。



就労準備支援事業については、様々な事情により働いた経験がない方や引きこもりの方など、すぐに仕事に就くことが難しい方を対象に生活習慣の改善や就労するための基礎能力形成のための支援として、各種セミナーやレクレーションなどを計画的に実施しているとの回答を得た。











以上



# 真志会行政視察報告書（北海道）

真志会 木戸理江

1. 派遣者 真志会：真野頼隆、谷口明弘、小路貴紀、桑原一知、木戸理江

2. 視察日時、視察先、視察項目

2022年8月2日（火）～5日（金）

北海道 苫小牧市、安平町、小樽市、余市町

3. 視察概要

苫小牧市：海の駅ぷらっとみなと市場、安平町：安平町物産館、道の駅あびら D51 ステーション  
小樽市：運河周辺土産物販売施設、余市町：道の駅スペースアップルよいち  
水俣の道の駅がリニューアルし、今後さらなる発展をとげるべく他施設の視察。



## 海の駅ぷらっとみなと市場

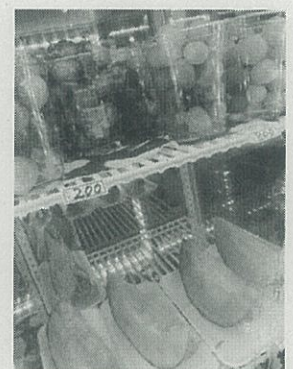
仮設のような作りの中に通路を挟み両サイドに海産物店や青果店・土産物や飲食店が並ぶ。2棟。広くないがゆえに地域の特産がぎゅっと詰まり、品を選ぶのはコンパクトだが種類が豊富。

1店舗が10畳ほどと狭いが、その分飽きることなく商品を見られ短時間での買い物には向いている。焼き牡蠣（席数6）の店で立ち食いで生食の牡蠣を食べたが、大ぶりで安価とありすぐ「送ろう」と購買意欲を掻き立てられる良い戦略と思った。（個数も自由）

果物も正規品はそれなりの値段がするが、その横でカットしたメロンや少々傷がついているぶどうやさくらんぼが売価の10分の1程度の値段でカップに入って冷やして売っており、味見としてもおやつとしても買ってみようという気にさせられる。（傷ありさくらんぼ、とても美味しかった）

特産品のホッキ貝は食堂で多種多様なメニューが並び、レトルトカレーなどの加工品も多い。

海鮮丼にあたっては地元寿司店が昼間の営業していない時間帯にここに入り、その日仕入れのネタで安価で提供してくれるとあり人気。



## ◇安平町物産館

安平町役場最寄りの早来駅に隣接。

物産館というよりは、安平町特別栄誉賞を与えられた競走馬（ディーインパクトなど）の歴史博物館の要素が強い。

競馬ファンにとってはここから輩出された重賞馬に時代の思い出を馳せられる場所である。





### ◇道の駅あびらD51ステーション

かつては石炭運搬の要衝地、展示保存してあるD51にちなんだ土産物や遊び場などが中心。

D51やキハ183の展示に合わせ、歴史や活躍していた写真などの展示も充実しており鉄道ファンの姿も見られた。

物産は広く北海道土産というより、安平町周辺のものに特化してあるため菜の花畑からとれた蜂蜜やチーズ羊羹など独特な商品が目を引く。



### ◇小樽市運河周辺土産物販売施設

小樽運河沿いのレンガ倉庫をスタートし、東部まで約2キロの通りに土産物店が並ぶ。

小さな通りを挟んで両側に様々な店が並び、観光地として大成功しているエリアである。

商品も200円程度の安価な個包装の菓子から、大人数向けのご当地限定バージョンの有名菓子など工夫が凝らしてある。



### ◇道の駅スペースアップルよいち

毛利宇宙飛行士の記念館に隣接し、道の駅にランクアップするべくトイレや休憩所を作った雰囲気、正直言って「これが道の駅？」と思う程の質素な作りで、狭く、商品も少ない。

ただ、りんごの生産地らしくりんごジュースなど加工品は多く並ぶ。目玉はアップルパイということで購入、暖かいうちに食べると美味しいがプロの味ではない。

10畳ほどのプレハブの売店に従業員が3人いたが、運営できているのだろうか、と余計な心配をしてしまった。

(トイレには不愛想な掃除の高齢女性もいた)



### 【所感】

大観光地の北海道でも、地域によって土産館は違いがあると感じた。

今回は特段流行っている道の駅を尋ねることはせず、視察先のルート上にあるところに特化した近隣に大きな施設や観光地が無いところが多かったためか、来場者もそれほど多くなく、独自の努力で集客アップをしているような雰囲気も見受けられない所が多かった。

行くまでの勝手な想像で「北海道だからどこの道の駅も活気があって、商品もふんだんにあるのだろう」と思い込んでいたが、想像は裏切られむしろ本市の新しい道の駅がどれだけ力を入れて努力しているかを改めて感じた。

お客様目線で訪れても、努力が足りない所は自然と購買意欲もそがれるし、比例して来場者も少なくなることは天下の北海道でも同じである。



# 会派行政視察報告書

報告者 真志会 桑原一知

## 1. 派遣者

(真志会) 真野頼隆 谷口明弘 小路貴紀 桑原一知 木戸理江

## 2. 視察の概要

令和4年 11月 8日(火)

静岡県御殿場市 「環境に特化したまちづくり」

## 3. 視察内容

御殿場市は富士山の景観、豊富な湧水・伏流水、豊かな緑、清浄な気候の恩恵を受ける。農業産出額の4割は「米」(9億円/年間)で「ごてんばこしひかり」は食味の良さで有名である。良質な水を使い「わさび」「水かけ菜」等も収穫される。また各種酒類の生産もされる稀有な地。

富士箱根伊豆観光交流圏の中心にあつて、東京から80km、高速道路を利用すると1時間で行き来できるアクセスであり、箱根(神奈川県)・富士五湖(山梨県)方面への交通結節点にも位置する。最近はアウトレットモールの開設もあり、観光交流人口は約1,400万人/年そのうち1,000万人はアウトレットモールのお客である。

富士の裾野からの眺望も良く、多くの研修施設・ゲストハウス・別荘も点在している。

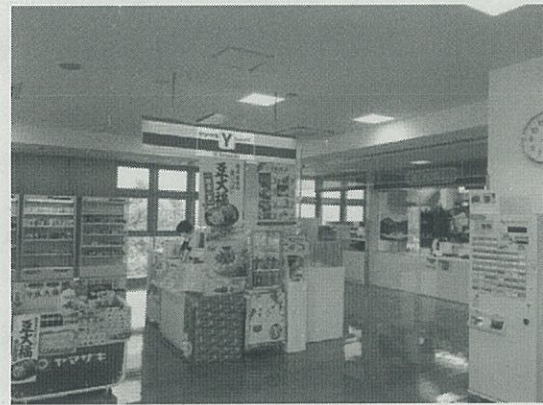
この様なことから「住みよさランキング 2021」では静岡県内1位である。

雄大な富士山を眺めながら、御殿場市役所に到着した。

市役所最上階にはレストランがあり売店も併設している。多くの市民が富士山を眺めながら食事を楽しんでおられ、市役所と市民の距離を縮めているように感じた。



「御殿場市役所」



「レストランに併設された売店」

### 「環境に特化したまちづくり」のこれまでの経緯

H17年、静岡県は、文化庁・山梨県・関係自治体と連携して富士山を世界遺産登録に向けた取組を推進。

H24年景観法に基づく「景観行政団体」へ、H25に富士山が世界文化遺産に登録される。

H26～28年 モデルフォレスト事業 ⇒ 戦後一斉植林された針葉樹が伐採期を迎えるなか、東京大学森林学研究室の協力のもと、産学官民の連携により、効果的な間伐・未利用材活用・里山再生を実施。

また、S60年から稼働していた(株)リコーがH25年に閉鎖されたが、グループの環境事業を推進したい(株)リコーと当時の市長の働きかけにより、リコー創立80周年記念として、グループの環境関連事業の拠点として「リコー環境事業開発センター」として再開。

H28年12月に未利用資源活用の木質チップを活用した「バイオマスボイラー」を設置。



環境に特化したまちづくり

環境先進都市

実現に向けて

御殿場市エコガーデンシティ構想

### 1 目的

世界遺産富士山の麓にふさわしい「優れた環境・景観の形成」と「産業・経済振興」が、好循環するまちの実現を目指す。

### 2 手法

本市の地域特性や恵まれた自然・社会条件を活かし、「産学官金の連携と市民参画」により、先端技術も活用しながら環境と景観の改善に向けた取り組みを継続的に進めることにより、地域経済活性化や市の魅力・ブランド力向上の実現を図る。

### 3 推進体制

御殿場市エコガーデン推進協議会（会長：商工会長）

委員数 40名（環境関連の企業・団体組織、金融機関、市職員等）

- H27.11 「駒門周辺地域エコシティ化推進協議会」発足
- H29.7 「御殿場市エコガーデンシティ推進協議会」発足
- H29.9 (株)リコーと「包括連携協定」締結
- H30.7 「御殿場市エコガーデンシティ構想」策定
- H31.4 「御殿場市SDGs推進本部」の設置
- R2.1 「御殿場市SDGs推進宣言」
- R2.2 「ゼロカーボンシティ推進宣言」
- R2.3 「御殿場SDGsクラブの発足」 ※現在、144企業団体加盟



## エコガーデンシティ構想の重点項目

- ① 世界遺産富士山の前庭にふさわしい景観の形成
- ② 自然との共生・里山づくり・生物多様性の確保
- ③ 再生可能エネルギー導入・省エネなど地球温暖化対策の推進
- ④ 環境・景観保全を支える先端技術の活用(ドローン等)
- ⑤ 地域資源を活用した商品開発やエコツーリズムの推進
- ⑥ 3Rの推進など循環型社会の形成

10の連携プロジェクトの設定



# 連携プロジェクト

1. 箱根山系の保全と活用(富士山眺望地の整備)  
箱根外輪山に富士山のビュースポットを整備 「企業版ふるさと納税」
2. 富士山桜いっぱいまちづくり  
シンボルロードとして延長 14.5 kmの新設市道に桜並木を整備。市内道路沿いの桜の適正管理にも努める  
「民地に協力依頼」
3. 家・庭・コモンスペース創造によるコンパクト・ガーデンシティ化  
都市計画法に則り、市街化調整区域に宅地造成。色彩の調和・緑化など総合的に景観形成を誘導。  
2か所 計18区画 「行政主導の宅地造成」
4. ハイブリッド車用充電リサイクル  
大量廃棄時期を迎える使用済リチウムイオン電池のリサイクルに向けたビジネスモデルの検証 「リコー」
5. バイオマス利活用推進  
バイオマスボイラーの活用(市内2か所) 「リコー・公共施設」  
生ごみのたい肥化 「一般廃棄物事業組合」
6. スマートファシリティの普及促進  
自動制御による照明照度の最適化により、オフィスの省電力とコスト削減のための展示を市役所庁舎で実施  
「リコー」
7. マイクロ水力発電普及促進  
小水力発電よりさらに小規模な発電の実証実験、共有地の無償提供  
「リコー・名古屋大学・インターフェイスラボ」
8. 御殿場型エコファーム  
成分分析により、特性把握と他産地との差別化(わさび) 「リコー」  
生産・加工調理・販売まで手掛ける安心食材 「市内料理店の農業進出」
9. ドローン等利活用による環境保全・防災等の推進  
公有地を活用し首都圏からの実証実験の誘致、大学研究機関による災害時の活用の研究、森林保全に関する研究 「学術組織との連携」
10. 水素ステーションの誘致  
FCV(燃料電池自動車)用の水素ステーションが令和2年4月開業、市長車をトヨタグループから貸与  
「イワタニ産業」



**プロジェクト5 木質バイオマス利活用の推進**

採択計画  
 東京大学 森林利用学研究室  
 NPO法人 地域活力創造センター  
 Gsk  
 エネルギー利用 RICOH imagine charge

【リコー環境事業開発センター】  
 バイオマスボイラーの創利用（冷熱房・給湯）による地域環境化対策への貢献  
 一年間400tのチップ利用で、約237t/年のCO<sub>2</sub>削減計画に対し、2018年度では300t/年で180tのCO<sub>2</sub>削減を達成

吸収式冷凍機    ボイラー 500kW    ボイラー 200kW    チップ置き場

**プロジェクト7 マイクロ水力発電普及促進**

いわゆる小水力発電よりも小規模な水力発電（発電出力 1.0KW以下）  
 一定の水量と落差が確保できる中小河川や用水路などの設置を想定  
 ・水量 20ℓ以上/秒 ・落差 3～5m

3Dプリンタで作った中空プロペラ  
 落ち葉などの異物による閉塞の防止  
 中空プロペラにより回転中の水車にて異物が通過する

☆発電した電気は歩道の夜間照明や災害時の非常用電源に活用を検討  
 ☆児童生徒等への環境教育にも活用

水車と発電機の一体化、模範成型品により小型軽量化

※リコー、名古屋大学、インターフェイスラボの共同開発



## SDGs未来都市への選定

令和4年5月 SDGs未来都市に選定される。提案書タイトルは「誰もが輝ける 富士の麓の環境を守り育てるまち御殿場」

- ① 地域産業の持続的発展 経済
- ② デジタル・絆・文化が調和する持続可能な社会形成 社会
- ③ 環境先進都市への挑戦 環境

- ★ 市内外の「多彩なステークホルダー」と連携
- ★ スポーツタウンまちづくり
  - オリンピックレガシー(自転車競技開催)
  - 「スポーツ・健康まちづくり優良自治体」選出
- ★ 地域防災力の強化
- ★ 地域の絆の醸成
- ★ 市内3高校とのコラボ事業の創出



## 現行のプロジェクトから、先導的取組に絞った 主要プロジェクトの設定

1. 脱炭素(再エネ・省エネなど)の取組みの見える化  
市内企業・団体の先進的な事業研究 など
2. 地域通貨と自治体マイナポイントの連携による経済活性化  
独自ポイントの地域循環の推進 など
3. 富士山ビューポイントの整備・活用  
箱根山系のビュースポットの整備及び富士山眺望遺産等の活用
4. 自然環境を活かしたドローンの普及・運用の促進  
測量・災害対応・教育等への活用、研究機関誘致による経地域済寄付
5. 木育推進による関連産業の活性化  
地場産材の有効な活用や各種産業への好循環の創出
6. 多様な農業生産につながる農用地再生  
米以外の新規特産物の開発、農用地を生産農地として再生

### 4. 所感

本市が今まで取り組んでいた環境施策を発展させSDGsへ進めてきたことは正解であったと改めて実感した。環境だけではなく、社会・経済を組み合わせる事で地域の活性化・人の繋がりや絆が強くなる。

何より、地域やまちの課題をすべての人が共有し、共に取組み解決に向け同じ方向に進める。

注目した点は、高校生とのコラボ事業である。本市でもアカデミアや連携大学と様々な取組みを実施しているが、御殿場市ではスマホアプリを活用し、まちのおすすめスポットを市内外に紹介している。

さらに郷土愛が増すのではないかと感じ、すぐにでも取り組める事業ではないかと感じた。

また、ドローンを活用した取組みは、災害利用や教育等・企業誘致にも繋がっている。私は情報発信に活用出来ると実感した。

またブドウ栽培では、農用地を生産農地とし再生(農地再生×新規特産物開発×農福連携×自己資金調達)されており、大変参考になった。

今回の視察で、本市の方向性の再確認と新たなアイデア等得るものがおおく、私もしっかりと取り組んでいきたいと感じた。



期日：2022年11月7日（月）～9日（水）

場所：静岡県御殿場市、熱海市

宿泊：御殿場市 ホテルクニミ、熱海市 ホテル大野屋

参加者：真野議員、谷口議員、小路議員、桑原議員、木戸

11/9（水）

9:00 熱海市役所 観光経済課MP戦略室 ロケ支援担当 山田久貴 様

観光地として高度経済成長期に大きく需要があった熱海温泉は、大宴会（飲み騒ぎ散財してしまう）のイメージ定着と、それに関する受入側のホスピタリティ低下とマンネリ化によりお客様の減少→観光業低下の一方だった。

そこに一般職からの転職で、生まれも育ちも地元である山田氏が入庁し、負のイメージ脱却と観光客の呼び戻しに役買う事に、スタッフは一人、着目したのは大型のハコ（旅館等施設）と東京から近いこと。

落ちたブランドイメージを上げればお客様は戻ると考え、ある番組のロケがあった時に「ロケ地として提供すること」を起案、その矛先にロケの検討やリサーチを一番に行うADを掴まえる事を始めた。

1. 親のように徹底的にサポートします 2. 先方に気遣いをさせない（24時間365日対応可能）

それがヒットし、市や地域住民も全面的に協力。

他市でNGなことも熱海ではできる、という話はたちまち広がり様々なロケが来るようになった。

それをテレビで見た視聴者が「行ってみようか」という気になり、次は受入側の意識と環境改革。

- ・ひとりでやる（低経費、スピード感、顧客との信頼感など）すぐに判断し動けるのは顧客にとって便利。
- ・何かに特化したものを行政がやる、必要とされる事に着目

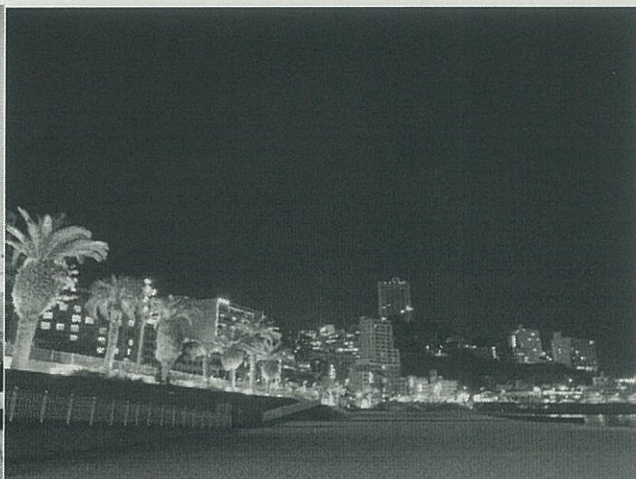
その町だからできる事、得意なものをどれだけ光らせるか（得意じゃない事をやろうとしても失敗する）

- ・人が動き始めたらあとは受入れ（町・宿）のホスピタリティを上げる
- ・「とにかくブランドイメージを上げよう」

一回落としたものを上げるには並大抵の努力では出来ない（その分上げていくと特化できる）

- ・特化することでよそに勝てる、強い商品は女性の「美容」

魅力度ランキングが箱根や日光をおさえ全国で13位まで上がっている、そうなるさらにお客様のために何ができるかを町や宿も考えるようになり、プラスの相乗効果となっている。





まとめ

何より注目すべきがスピード感だと思う。

相手の望みにいかに早く答えるか、それはおのずと「決定を早められる」相手への利便性に繋がる。

色々と検討を重ね、上の決裁を待って、それから動くものと大きく違い、ニーズにすぐに答えられるところがいかに他社の追従を許さない勝利を導いているかは、本市でも大いに参考にすべきことである。

動ける人材を動きやすいように環境整備をしているか、本市ではあらためて再検討し、素材を活かす観光業のバックアップを積極的に行うべきであるとあらためて考えた。

地域の素材をいかに活かすかは、行政の動きの速さに影響するし、情報をキャッチしてどうやってそれを形にするかは机上では後れを取ってしまうことになる。

地域との連携やアクションを再構築するきっかけにして欲しいと切に願う。



# 行政視察報告書

令和4年11月21日

真志会 真野頼隆

私共真志会は去る令和4年11月7日に静岡県裾野市にトヨタが開発予定の未来都市「ウーブン・シティ(Woven City)」の建設予定地を訪ねた。

未来都市「ウーブン・シティ」とは、2020年末に閉鎖されたトヨタ自動車東富士工場の跡地にロボット・AI・自動運転・Ma

as・パーソナルモビリティ・スマートホームといった先端技術を入々のリアルな生活環境の中に導入・検証出来る実験都市のことである。

2021年2月より着工し、パートナー企業や研究者と連携しながら、技術やサービスの開発・実証のサイクルを素早く繰り返し、人々の暮らしを支えるあらゆるモノやサービスが情報で繋がることで生まれる新たな価値やビジネスモデルを見出す。



東京ドーム約15個分の土地にトヨタの従業員や関係者2000名の住民の入居を想定。将来的には一般入居者の募集や、観光施設としての運営も期待されている。

プロジェクトの核となる実験都市「ウーブン・シティ」は、日本語に直訳すると「編まれた街」の意。これは、街を走る道が網の目のように織り込まれたデザインに由来する。

その道とは具体的に以下、3種類に分類される。

1. スピードが速い車両専用の道として、「e-Palette」など、完全自動運転かつゼロエミッションのモビリティのみが走行する道。

2. 歩行者とスピードが遅いパーソナルモビリティが共存するプロムナードのような道。

3. 歩行者専用の公園内歩道のような道。

これらが、まるで血管のように、それぞれが街の交通や物流において重要な役割を担う。



なお、人々の暮らしを支える燃料電池発電も含めて、この街のインフラはすべて地下に設置される。

「ウーブン・シティ」においては、ENEOSをコアパートナーに迎えて、水素エネルギーの利活用を進めていく。四大都市圏において商用水素ステーションを45ヶ所展開する、水素事業のリーディングカンパニーであるENEOSの知見を活かし、水素を“つくる”、“はこぶ”、“つかう”という一連の

流れを実現する。「ウーブン・シティ」の隣接地に水素ステーションを建設し、製造したCO<sub>2</sub>フリー水素を乗用車や商用車など様々な燃料電池車に供給するだけでなく、パイプラインで「ウーブン・シティ」への供給も行う。なお、水素ステーションの運営開始は、2024年から2025年の開所前を予定している。

NTTとのパートナーシップにおいては、NTTの通信インフラにおける高い技術力を



活かした、新たなサービスの開発も進めていくという。クラウドサービスやI.T、ビッグデータなどのサービスにおける効率化・高度化を図り、ヒト・クルマ・イエ、また住民・企業・自治体等に係る生活、ビジネス及びインフラ・公共サービス等の全ての領域への価値提供を行う「スマートシティプラットフォーム」を共同で構築し、先行ケースとして「ウーブン・シティ」にて展開する見込みだ。街の建物は主にカーボンニュートラルな木

材で建設、屋根には太陽光発電パネルを設置するなど、環境との調和やサステイナビリティを前提とした街づくりが基本。住民は、室内用ロボットなどの新技術を検証するほか、センサーのデータを活用するAIで健康状態をチェックするなど、日々の暮らしの中に先端技術を取り入れる。また、街の中心や各ブロックには、住民同士のコミュニティ形成やその他様々な活動をサポートする公園や広場も整備される。



私たちが訪れた工事現場は塀に囲まれていて、中の状態は詳しくはわからなかったが、聞くところによると2025年位には街の姿が現れるようである。先般行われた市長選で「ウーブン・シティ」構想を支援していた現職の市長が敗れ、新市長はその構想支援を見直すということで、どうなるのかと私たちは心配するところであるが、トヨタとしては単独で行った方が規制なくやれるのでいいとのことであった。